

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401、044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第113号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
 「川崎の文化財」-13

麻生区岡上の遺跡 —岡上丸山遺跡— ===川崎市域における旧都筑郡内の遺跡===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

川崎市域における旧都筑郡内の遺跡ということで、麻生区早野字上ノ原に所在する早野上ノ原遺跡と麻生区岡上字栗畑に所在する岡上栗畑遺跡[岡上-4遺跡](岡上廃寺)を紹介してきましたが、今回は同じく岡上に所在する岡上丸山遺跡についてお話しさせていただこうと思います。

岡上丸山遺跡は、図1のとおり、前回までお話した岡上栗畑遺跡の谷を挟んだ西側の丘陵先端部に位置しており、現在の岡上小学校及びその周辺にあたります。地元で「丸山」と呼ばれる山の前面に立地していることから「岡上丸山遺跡」と名付けられました。本遺跡は、この岡上小学校建設事業に先立つ発掘調査として、1985(昭和60)年2月20日～1986(昭和61)年1月20日まで実施されました。調査面積は約7,000㎡で、調査の結果、縄文時代の竪穴建物25軒以上や埋甕・土坑等や古墳時代～平安時代の竪穴建物約90軒が発見されるとともに、多数の土器・石器や石製品・鉄製品等が出土するなど、この遺跡が縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代と各時代にまたがる複合遺跡であることが分かりました。

この岡上丸山遺跡の発掘調査ですが、岡上の歴史を知る上で、とても重要な発見がありました。それは、平安時代初め頃と推測される竪穴建物から出土した1点の墨書土器です(写真1)。一見、何が書かれているかわかりませんが、これは「岡上」と書かれています(図2)。この岡上は、まさに現在の地名でもある「岡上」を表していると考えられますので、たった1点の出土ですが、まさに平安時代初期、今から1,000年以上前には、この地が「岡上」と呼ばれていたことを明らかにした重要な発見といえます。

また、墨書土器は墨で文字や記号が書かれた土器等のことですが、古代のこの地域では、文字を書くことができる人たちは、役所や寺院といった公的な機関等に関連する人が多かったと考えられていますので、墨書土器が発見されたことは、岡上にそうした公的な機関が存在した間接的な証拠といえます。本遺跡東側には前回までお話した岡上廃寺と推定される岡上栗畑遺跡[岡上-4遺跡]が所在することを考えると、本遺跡は、岡上廃寺と密接な関係性をもった集落であったと考えられます。

このように、岡上小学校建設に伴い発掘調査が実施された岡上丸山遺跡ですが、調査が終わり30年が経過した今でも、岡上栗畑遺跡[岡上-4遺跡]とともに、岡上の歴史を明らかにする上で重要な遺跡です。この貴重な資料等と、近年の岡上での発掘調査で得られた知見を合わせ、岡上丸山遺跡の調査成果を再検討することで、これまで明らかになっ

ていなかった岡上の歴史を解明できるかもしれません。(続)

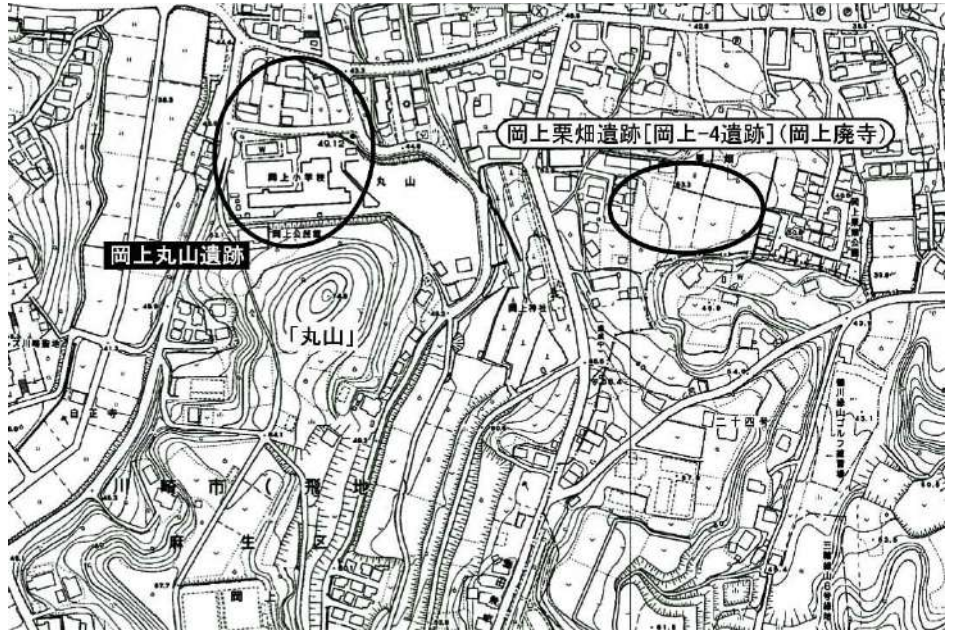


図1 岡上丸山遺跡と岡上栗畑遺跡(岡上廃寺)



写真1 「岡上」と書かれた墨書土器



図2 墨書土器実測図

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第83話

民間信仰 4 石造物～お地蔵さま

小島 一也 (遺稿)

私達の知る石造物の中で、最も親しまれているのはお地蔵様で、このお地蔵様とは仏教という菩薩のお姿を言い、菩薩とはお釈迦様が入滅の後の仏様とのことで、この地蔵信仰は奈良時代から始まり、特に江戸時代庶民の間で盛んになり、その信仰も様々で、お姿も異なっています。

片平修廣寺山門の左側に、高さ約 1.8m、幅約70cmの大きな燈籠のような石塔(慶応四年造立)がありますが、この石塔は六角形で、よく見ると6面のそれぞれに異なった地蔵菩薩像が浮彫されています。これはお地蔵様は単独で立つものばかりではないことを表したもので、これを燈籠型六地蔵と呼ぶそうです。六地蔵とは、死者が冥土に赴くと、地獄・極楽など冥土には六つの道があり、死者を迷うことなく六道の冥府へ案内して下さる仏を言います。この燈籠型六地蔵は上麻生の浄慶寺にも高さ約 1 mほどの塔がありますが残念なことに剥落が激しく、六地蔵の姿は判別できるものの、その銘・造立期が読み取れません。また、王禅寺境内にも古い六面地蔵があり(年代不詳)、岡上東光院には三面六地蔵(1面に2体彫、造立期不明)があります(市調査報告書)。なお市調査によると幸区の無量院には燈籠の軸に六地蔵を刻みその下に三猿を浮彫した寛文元年(1661)造立の塔があるそうですので、これ等を考えますと王禅寺等の燈籠地蔵塔は信仰当初の造立だったと思われ(修廣寺の塔を除き)。



修廣寺の六地蔵



川井田の子育て地蔵

この燈籠六地蔵に比べ、最もポピュラーなのが、多くのお寺の参道や境内に赤い頭巾に赤い袈裟、6体並ぶ六地蔵で前述したようにこのお地蔵様を見ると、お顔の表情、持ち物、お手の仕種(しぐさ)、御召し物が異なっています。これは死者を、地獄道(罪悪の重い者が行く道)、餓鬼道(欲におぼれた者が行く道)、畜生道(人間以外の生物の行く道)、修羅道(戦の世界を行く道)、人道(煩惱を持つ者の行く道)、天道(善行の者が行く極楽の道)の6道ある冥府への道を案内する旅姿を現したもので、人間は誰でも罪深く煩惱はあるもの、そこに救いを求めたのが六地蔵信仰だったのでしょう。

風雪に耐え村の辻に立つ”石のお地蔵さま”の姿は私たちが祖先の生活を偲ぶ原風景ですが、このお地蔵様の造立のピークは享保年間(1716~35)の頃で(市調査書)、確認された地蔵像は市内で約270体とのことです。今は野山や村の辻は無く、多くのお地蔵様は姿を消しますが、そのいくつかは有志の方によって今も大切に残され、民俗信仰を知る文化財になっています。

岡上の川井田には赤い頭巾に赤い袈裟、高さ約 1 m程の典型的な地蔵様が子育て地蔵と呼ばれ小屋が設けられ保存されています。また、同じ岡上の山伏谷戸には、谷戸のお地蔵様と親しまれる地蔵が今も存在しており、栗木常念寺の六地蔵の中の一は、イボ取地蔵ともいわれ、この地蔵の頭や顔を撫で擦るとイボが取れると信仰され、事実、お顔の部分が擦り減っています。

万福寺の十二神社の境内には寛文十三年(1673)造立銘のある、右手に錫杖、左手に宝珠を持った光背型地蔵菩薩があり、今は区画整理事業で神社下に集められ大切に保存されています。光背型地蔵とは光芒を背に型どられ地蔵像が浮き彫りされた板碑型の石造物で個人の造立が多く、王禅寺西、真福寺跡の紫陽花の咲く草叢(くさむら)に何方が管理されているか石仏群があり、その中に元禄年間造立のこのお地蔵様を見ることが出来ます。王禅寺日吉、山王社の東には地域の方によって石仏が集められていますが、ここにも光背型地蔵様があり、この頃この地の庶民の間に地蔵信仰が盛んだったことを物語っています。そして、そのお地蔵様は前述したように燈籠型から、寺の境内の六地蔵、野辺に立つ石の地蔵、そして庶民が造立の光背型地蔵に至りますが、その信仰は六道冥府から菩提、延命、病魔、厄除け、家内安全、子育てなど、時代とともに変化しています。そして、その中で近世、子育てと名が付くお地蔵様が多くなってきています。



常念寺イボ取地蔵のお顔



日吉のお地蔵

参考資料:「川崎市石造物調査報告書」「くろかわ」「岡上の魅力発見」「歩け歩こう麻生の里」

シリーズ

教育の歩み 第1部

学校の誕生と成長(1)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆はじめに◆

私も皆さんも「学校」と聞くと、すぐに同年齢の集団で学級を構成し、同年齢の仲間と共に学んでいく世界を連想し、それが当然だと考えていますね。自分もそうだったし、兄弟姉妹は勿論、両親や祖父母もまた、そういう学びを体験してきたのですから、当然と言えば当然です。

しかし、同一年齢で学級を構成し、その学級を年齢に応じて学年として分けると言う教育方法は、そんなに古くから存在したわけではありません。教育の場として学校が生まれた当時は、教場はあっても学級教室(クラスルーム)はなかったのです。いったいどのような変遷を経て、現在のような学校システムが登場したのか。少々長いシリーズになると思いますが、しばらくの間、教育史と教育社会史を紐解きながら、この問題を考えたいと思います。これまでのシリーズ同様お付き合いいただければ幸いです。

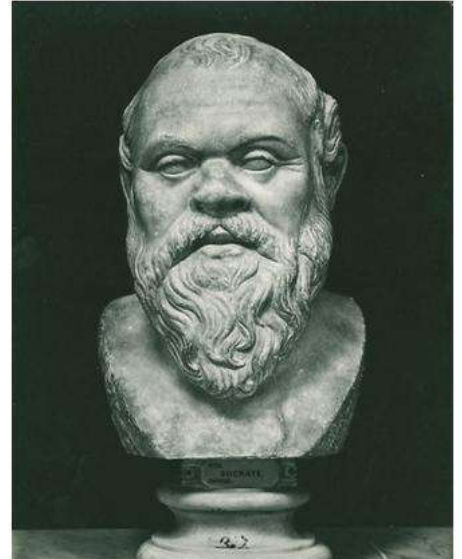
◆文字の誕生◆

教育の起源を辿れば、最初に登場するのは社会教育です。原始的な生活の中でも、大人たちや年長者に教えられて、子どもたちは食べられる木の実や野草と食べられない実や草を区別する事を知っていました。そればかりか、痛みを和らげたり、傷の化膿を止める薬草なども熟知していました。まさに社会教育の成果でした。この時代は勿論、もう少し後の時代でも、近代以降のような厳密な意味での家族は、まだ存在しなかったため、家庭教育は行われていませんでした。日本で家族制度が確立するのは、戦国大名が領国支配を確立した頃からのことです。

さて学校教育はというと、社会教育からはるかに遅れて出発するのですが、皆さんも聞いたことがあると思いますが、学校とか教育の起源を語ると、すぐに出てくるのが、英語の school の語源になったことで知られる、ギリシアの哲人ソクラテスの青空教室です。彼は「スカラの森」と呼ばれた場所で、彼を慕う若者たちとの対話を楽しみ、若者たちはまた師を慕って、対話から多くの事を学んだと言う有名な故事です。

ちょっと脱線しますが、実はソクラテスは、自分では何も書き遺していません。講義録を作るなどと言う発想は、彼にはなかったのです。幸いにスカラの森に集った彼の弟子たちが、師の言葉を様々に書き残してくれたので、彼の思想を知ることが出来るのです。有名な『ソクラテスの弁明』も弟子の1人に依って、記されたものです。

ところで、もう少し遡らせて下さい。人は言葉を発し、文字を発明しました。言葉は意志伝達の手段として発明され、人の知能の発達やそれに応じた感情表現の蓄積によって、単なる手段から一つの文化にまで成長を遂げました。その結果、自分たちの言葉を守り育てることは、決して放棄してはならない最重要の事柄になりました。



ソクラテスの彫像

自分たちの言葉を失った民族は、やがてアイデンティティを失い、民族としては滅びの道を歩むこととなります。だからこそ、植民地宗主国は、支配地に母国語に依る教育を禁止し、宗主国の言語に依る教育を徹底しようと努めたのです。

また話が逸れましたね。話すことは、家庭や地域社会において、誰もが学びます。問題は文字です。生まれつき耳に障害があり、音を聞くことが出来ずに育った人を除けば、言葉は誰でも話すことが出来ます。しかし、文字はそうはいきません。文字は誰かに特別に教わらないと、読んだり書いたり出来ません。こうした読み書き能力を、最近は識字率と表現しています。識字率は極めて低い時代が長かったのです。読み書き能力を持つことは、一部の特定の人々にだけ必要とされたのです。このことは、文字誕生の歴史に遡ると容易に理解できます。

文字は何のために生まれたのか。結論を申し上げますと、文字は支配階級の道具として、支配の手段として生まれました。世界最古の法と言われるハムラビ法典は、皆さんもご存知と思います。石に彫られ、現在はフランスのルーブルに展示されている、「眼には眼を、歯には歯を」と要約されるあの法です。ここに明らかのように、文字は、支配者の定めた掟を徹底するために生まれたのです。

文字にはもう一つ数字があります。こちらはやがて商人の世界でなくてはならないものになって行きますが、当初は年貢の徴収のための必要から生まれたものでした。年貢や税は、誰もが出来るなら支払いを減らしたいとか、支払いたくないと考えるものです。徴収役人との間で、「もう払った」「いやまだだ」などと、言い争いになることも少なくなかったのです。そこから、支払いの記録をつけておく必要が意識され、数字が実用化されたというわけです。文字も数字も、共に支配の道具として生まれたのです。

続く



ハムラビ法典が記載された石柱

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

10月 7・28日(毎土曜日)

11月 5・12・19・26日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (10月14・21日は休館です)

柿生郷土史料館友の会 第7回史跡見学バスの旅

房総半島の鎌倉時代を訪ねる ～頼朝伝説と日蓮上人史跡～

日 時：2017年11月1日(水)

主な見学先：鹿野山神野寺、仁右衛門島、清澄寺と誕生寺

集 合：7時45分 新百合丘駅北口 (21ビル前の歩道)

解 散：18時30分頃 新百合ヶ丘駅 その後柿生駅近く

募 集：44名

費 用：9,100円

申し込み：往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項：参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先：215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1
柿生中学校内 柿生郷土史料館

(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切 10月5日(木)

問合せ先：小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622



第70回 カルチャーセミナー

シンポジウム

故小島一也氏著『麻生の歴史を探る』を読んで

柿生文化に連載中の『麻生の歴史を探る』が、未掲載の遺稿を含めてご家族の手で、先生の遺著として出版されました。そこで昨年3月の「偲ぶ会」に続いて、この遺著を中心に、再度小島先生を、そして小島先生の業績を振り返ってみたいと思います。

コーディネーター：小林基男氏 (柿生郷土資料館専門委員)

パネラー：(未定)

日時：11月12日(日)午後2時～4時 会場：柿生中学校 視聴覚室

祝 柿生中学校70周年特別企画

戦中戦後の教科書展再び

柿生中学校誕生当時の教科書を当時の小学校の教科書も含め、多数展示します。

期間：10月7日(土)～28日(土) 会場：柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。